

第47回名古屋春栄会
演目のあらまし

平成26年1月5日

名古屋春栄会事務局

目 次

翁（おきな）	1
難波（なにわ）	3
羽衣（はごろも）	4
鵜飼（うかい）	5
生田（いくた）	6
岩舟（いわふね）	7
吉野静（よしのしずか）	8
羽衣（はごろも）	9
忠度（ただもの）	10
是界（ぜがい）	12
岩舟（いわふね）	13
融（とおる）	14
草紙洗小町（そうしあらいこまち）	15
養老（ようろう）	16
鶴亀（つるかめ）	17
〔能のミ二知識	18〕

このリーフレットは、第47回名古屋春栄会の演目を解説したものです。
演目の記載順は、番組の順です。
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

翁（おきな）

【作者】 不詳

【登場人物】 シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穡を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の3人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」とい2つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ どうどうたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

シテ 所千代までおわしませ。

地謡 われらも千秋さむらおう。

シテ 鶴と亀との齡にて。

地謡 幸ひ心にまかせたり。

シテ どうどうたたりたたりら。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

千才 鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

千才 たえずとうたり。たえずとうたり。

<千才舞>

千才 所千代までおはしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。

日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

<千才舞>

シテ あげまきやとんどや。

地謡 よばかりやとんどや。

シテ ざしていたれども。

地謡 まいろうれんげじや。とんどや。

シテ 千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。

地謡 そよやりちや。とんどや。

シテ 千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。

天下泰平国土安穩。今日のご祈祷なり。ありわらや。なじよの翁ども。

地謡 あれはなじよの翁ども。そやいづくの。翁ども。

シテ そよや。

<翁舞>

シテ 千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡 万才楽。

シテ 万才楽。

地謡 万才楽。

難波（なにわ）

【分 類】初番目物（脇能） *楽

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：王仁（面・悪尉）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

廷臣が従者と共に熊野から京の都に帰る途中、難波に立ち寄ります。すると杉箒を持った老翁が連れの男と共に現れ、天下泰平の春を詠いながら、梅の木陰を掃き清めます。廷臣が老人たちに梅の木のいわれを尋ねると、老翁は難波津の歌、仁徳帝の慈愛、難波の都の平和と繁栄について語り、自分は仁徳帝の即位を推進した百済国の王仁であると名乗り、舞楽を舞うことを約して立ち去ります。

<中入>

難波の春の夜に木華開耶姫と王仁が現れて名乗ります。そして木華開耶姫が梅の花を詠じて舞を舞います。続いて王仁が難波を祝福して舞楽を舞います。舞楽のうちの古の聖賢をたたえ、治世を祝福します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

あら面白の音楽や。あら面白の音楽や。時の調子にかたどりて。春鶯囀の楽をば。春風ともろともに。花を散らしてどうど打つ。秋風楽はいかにや。秋の風もろともに。波を響かしどうど打つ。万歳楽は。よろず打つ。青海波とは青海の。波立て打つは。採桑老。抜頭の曲は。返り打つ。入り日を招き返す手に。入り日を招き返す手に。今の太鼓は波なれば。寄りては打ち、返りては打つ。この音楽に引かれて。聖人御代にまた出で。天下を守り治むる。天下を守り治むる。万歳楽ぞめでたき。万歳楽ぞめでたき。

羽衣（はごろも）

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：天人（面・増女）

【あらすじ】（今回の仕舞 [キリ] の部分…下線部）

駿河国（静岡県）三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣りにやって来ます。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見廻すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようと持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと返そうとしません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は喜んで承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（今回の仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

あずま遊びのかずかずに。あずま遊びのかずかずに。その名も月の。色人は。三五夜中の空にまた。満願真如の影となり。御願円満国土成就。七宝充滿の宝をふらし。国土にこれを施したもう。さるほどに。時移って。天の羽衣。浦風にたなびきたなびく。三保の松原浮き島が雲の。足高山や富士の高根。かすかになりて天つみ空の。霞にまぎれて失せにけり。

鵜飼 (うかい)

【分 類】五番目物（鬼物＝鬼神物） ＊カケリ

【作 者】榎並左衛門五郎原作、世阿弥改作

【主人公】前シテ：鵜使いの老人（面・三光尉）、後シテ：閻魔王（面・小癡見）

【あらすじ】（仕舞 [キリ] の部分…下線部）

安房国（千葉県）の清澄の僧が、甲斐国（山梨県）への行脚を志し、途中、石和川のほとりに着きます。その土地の人に、一夜の宿を頼みますが、旅の者に宿を貸すことは禁制だと断られます。その代わりに、川辺の御堂を教えられ、そこに泊まることにします。するとそこに一人の老人が鵜を休めるために立ち寄ります。僧が、老人なのにいつまでも殺生するのはやめて、他の職業についたらと意見をすると、老人は、自分は若い時からこの仕事で生計を立ててきたので、今さらやめるわけにはいかないと答えます。従僧が、二、三年前にこの地を訪れた時、このような老人に会い、もてなしを受けたと話すと、老人はその鵜使いは禁漁を犯したため殺されたと語り、実は自分がその亡霊だと明かします。僧のすすめで亡者は罪業消滅のため鵜飼のさまを見せて消えてゆきます。

<中入>

僧たちはやって来た先刻の土地の者からも、密漁をして殺された男の話を聞き、先ほどの老人こそ鵜使いの化身であったと信じ、法華經の文句を川辺の石に一字ずつ書いて川に沈めて回向します。すると地獄の鬼が現れて、かの鵜使いは地獄へ墮ちるはずであったが、生前、僧を接待した功德と、法華經の効力によって救われ、極楽へ送ることになったと告げ、法華經のありがたさをたたえます。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

法華は利益深きゆえ。邪道に沈む群類を。救わんために来たりたり。げに有難き誓いかな。妙の一字はさていかに。それは褒美の言葉にて。妙なる法と説かれたり。經とはなどや名付くらん。それ聖教の都名にて。二つもなく。三つもなく。ただ一乗の徳によりて。奈落に沈み果てて。浮かみがたき悪人の。仏果を得ん事は。この經の利益ならずや。これを見かれば聞く時は。これを見かれば聞く時は。たとい悪人なりとて。慈悲の心を先として。僧会を供養するならば。その結縁に引かれつつ。仏果菩提に至るべし。げに往来の利益こそ。他を助くべき力なれ。他を助くべき力なれ。

生田（いくた）

【分 類】二番目物（修羅物＝公達物） *中ノ舞

【作 者】金春禅鳳

【主人公】シテ：平敦盛の霊（面・冠形童子）

【あらすじ】（今回の独吟〔クセ〕の部分…下線部）

賀茂明神へ参詣した帰り、法然上人は美しい手箱に入った男の子を拾います。その後、その子は健やかに成長しましたが、ある時期から、自分に父母がいないことを悲しむようになりました。そこであるとき、上人が説法のおりに、この話をすると、聴衆になかから若い女性が現れ、自分こそ、その子の母であると名乗り出、父親は一ノ谷の合戦で戦死した平敦盛であると言います。この話を聞いた男の子は、賀茂明神に17日間の参詣を続け、神の力で亡き父に再会させてくれるようにと誓願しました。そして満願の日、賀茂明神から生田の森に下れ、というお告げを聞きます。男の子は、従者を連れて、はやる心を抑えながら生田に向かいます。生田の森は、森の景色、川の流れ、いずれも都で聞く以上に素晴らしい所でした。日が暮れ、一行が人家に宿をとろうとすると、奥から甲冑をつけた若武者姿の敦盛の幽霊が現れます。その姿を見て、ようやく父に会えた、男の子は袂にすがりつきます。敦盛の幽霊は、息子との再会の喜びながらも、自分の死後、母の手からも離され、仏門の世界に入らざるを得なかった息子の境遇を哀れみます。そして、父は賀茂明神に誓願した息子の孝行心によって姿を見せることができたと言い、時の経つのも忘れて、平家が都落ちをしてから自分が討たれた一ノ谷の合戦までの様子などを話します。しかし、まもなくすると、地獄の閻魔宮からの使いが現れ、敦盛の帰りが遅いため、閻王が怒っていることを伝えます。すると黒雲にわか立ち曇り、どこからともなく無数の修羅の敵が敦盛に戦いを挑みかかってきます。勝手知ったる修羅道の戦いなので、敦盛は真っ向から太刀を振りかざし、並みいる敵を倒していきます。そうして明け方を迎え、黒雲も、修羅の敵の姿も消え失せると、父は息子に弔いを頼み、未練を残しながらまた霊界へと帰っていくのでした。

【詞章】（今回の独吟〔クセ〕の部分の抜粋）

然るに平家の。栄花を極めしその始め。花鳥風月のたわむれ。詩歌管絃のさまざまに。春秋を送り迎えしに。いかなるおりか来たりけん。木曾のかけ橋掛けてだに思わぬ。敵に落されて。主上を始め奉り。一門の人もことごとく。花の都を立ち出で。西海の空におもむきぬ。習わぬ旅の道すがら。山を越え海を渡り。しばしは天さがる。鄙の住居の身なりしに。また立ち帰る浦波の。須磨の山路や一の谷。生田の森に着きしかば。ここは都もほど近しと。一門の人人も。喜びをなししおりふしに。範頼義経のその勢。雲や霞のごとくにて。しばらく戦うといえども。平家は運もつき弓の。やたけ心もよわよわと。皆散りぢりになりはてて。哀れも深き生田川の。身を捨てし物語。語るぞよしなかりける。

岩舟（いわふね）

【分 類】初番目物（脇能＝荒神物）

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：童子（面・童子）、後シテ：龍神（面・黒髭（泥小飛出））

【あらすじ】（今回の仕舞の部分…下線部）

時の帝が摂津国（大阪府）住吉の浦に、新たに浜の市を開き、高麗や唐土の宝物を買い取るようにとの宣旨を下されます。そこで、命を受けた勅使が住吉へ下向します。すると、そこへ姿は唐人ながら、日本語を話す一人の童子が、銀盤に宝珠を乗せて現れます。勅使が不審に思って問いかけると、童子はめでたい御代を寿いで来た^と告げ、また、この宝珠も君に捧げたい、龍女の珠とでも思っ^ていただければありがたい^と言います。そして、住吉の浜に立ついろいろな市のことなどを語ります。また、このあたりの景色をめで、さらに天がこのめでたい代をたたえて、極楽の宝物を降らすために、岩船に積み、今、ここへ漕ぎ寄せるところだ^と言います。そして、自分こそは、その岩船を漕ぐ天ノ探女であると明かして消え失せます。

<中入>

続いて、海中に住む龍神が、宝を積んだ岩船を守護するために現れます。そして、龍神は八大龍王達も呼び寄せ、力を合わせて岩船の綱手を引き寄せ、住吉の岸に無事に到着させます。山のように積まれた金銀珠玉は、御代の栄を寿ぐように光輝きます。

【詞章】（今回の仕舞の部分の抜粋）

宝をよする波の鼓。拍子を揃えてえいやえいや。えいさらえいさ。引けや岩船。天の探女か。波の腰鼓。ていとうの拍子を。打つなりやさざら波、えめぐりめぐりて住吉の松の風。吹き寄せやえいさ。えいさらえいさと。押すや唐簾の。押すや唐簾の潮も満ち来る。波にのって。八大龍王は。海上に飛行し。御船の綱手を手に繰りからまき。潮にひ引かれ。波にのって。長居もめでたき住吉の岸に。宝の御船を着け納め。数も数万の捧げ物。運び出だすや心のごとく。金銀珠玉は降り満ちて。山のごとくに津守の浦の。君を守りの神は千代まで。栄うる御代とぞ。なりにける。

吉野静（よしのしずか）

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】世阿弥

【主人公】シテ：静御前（面・増または小面）

【あらすじ】（今回の仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

源義経が吉野の衆徒の裏切りによって吉野山を落ちたとき、防ぎ矢を仰せつかった佐藤忠信は都道者を装って大講堂での衆徒の詮議の様子を窺います。そして、衆徒の詮議の中に入って、頼朝と義経が和解したという噂や義経の武勇を語って義経追撃の矛先を鈍らせます。やがて静御前も出てきて、忠信との打ち合わせどおり、舞の装束で、法楽の舞を舞います。静は忠信と呼吸を合わせて義経の忠心を説き、頼朝との和解を匂わせます。衆徒は静の舞の面白さに時を移し、また義経の従者達の武勇に恐れをなし、ついに一人として義経の追討に赴く者はいませんでした。

【詞章】（今回の仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

賤やしづ。しづのおだまきくりかえし。昔を今に。なすよしもがな。大かた舞の面白さに。大かた舞の面白さに。時刻を移して進まぬもありけり。または判官の武勇におそれてよし義経をば落とし申せと。僉議を加うる衆徒もありけり。さるほどに。時移って。主君も今は忠信が。かしこき謀にて難なく君をば。落とし申し。心静に願成就して。都へとてこそ。かえりけれ。

羽衣（はごろも）

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：天人（面・増女）

【あらすじ】（今回の連吟〔クセ〕の部分…下線部）

駿河国（静岡県）三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣にやって来ます。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見廻すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようと持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと返そうとしません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は仕方なく承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（今回の連吟〔クセ〕の部分の抜粋）

春霞。たなびきにけり久かたの。月の桂も花や咲く。げに花かずら。色めくは春の
しるしかや。面白や天ならで。ここも妙なり天つ風。雲の通路吹きとじよ。乙女の
姿。しばし留りて。この松原の。春の色を三保が崎。月清見瀉富士の雪。いづれや
春のあけぼの。たぐい波も松風も。のどかなる浦の有様。その上天地は。何を隔て
ん玉垣の。内外の神の御末にて。月も曇らぬ日の本や。君が代は。天の羽衣まれに
来て。なずともつきぬ巖ぞと。聞くも妙なり東歌。声そえて数々の。笙笛琴篳篥。
孤雲のほかにみちみちて。落日の紅は。蘇命路の山をうつして。緑は波に浮島が。
拂う嵐に花ふりて。げに雪をめぐらす。白雲の袖ぞ。妙なる。

忠度（ただのり）

【分 類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面：三光尉）、後シテ：平忠度の霊（面：中将）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

藤原俊成が亡くなり、その家人の一人が出家して、旅僧となって西国行脚に出かけます。そして、須磨の浦まで来た時、薪に花を折りそえて背負ってやってくる老人に出会います。老人は、ある人の亡き跡のしるしであると一本の桜に礼拝をします。旅僧が、その老人に一夜の宿を乞うと、この花の下にまさる宿はあるまいと言い、「行き暮れて木の下陰を宿とせば、花や今宵の主ならまし」と詠んだ平忠度が、ここに埋められているのだ、忠度と俊成とは和歌の友であったから、あなたにも縁があるはずだ、と言います。僧が驚いて念仏を手向けると、老人は嬉しそうに、あなたの弔いを受けたいために来たのだ、どうかここに寝て夢の告げを待って下さい、といって姿を消します。

<中入>

その夜、花の木陰に仮寝した僧の前に、甲冑姿の忠度の亡霊が現れ、浮世に心残りが多いが、中でも自分の歌が『千載集』に取り入れられながらも、朝敵となったために「読み人しらす」とされていることが妄執の第一である、だから定家に願って作者名を明らかにしてほしいと訴えます。そして、寿永の昔、出陣に際して、俊成の家を訪れ、歌集を託して出陣し、一の谷の合戦で岡部の六弥太に討たれた有様を詳しく再現して見せます。さらに討ち果たした六弥太は、その死骸の籟につけられた短冊から忠度と知り、いたわしく思った心情を見せ、どうか回向してほしいと、花の根元に消えてゆきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

われも舟にのらんとて。汀の方に打ち出でしに後ろを見れば。武蔵の国の住人に、岡部の六弥太と名乗って。六七騎が間追っかけたり。これこそ望むところよと思ひ。駒の手綱をひっかえせば。六弥太やがてむずと組み。両馬が間にどうぞ落つ。かの六弥太をとって押さえ。腰の刀に手をかけしに。六弥太が郎等、御後より立ち廻り。上にまします忠度の。右の腕をうち落とせば。左の御手にて、六弥太とって投げのけ、今は叶わじと思し召して。そこを退き給え人人よ、西拜まんと宣いて。光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨と宣いしに。御声の下よりも。痛わしやあえなくも、六弥太たちを抜き持ち遂に御首を打ち落す。六弥太心に思うよう。痛わしやかの人御死骸を見奉れば。その年もまだしき。長月頃の薄曇り。降りみ降らずみ定めなき。時雨ぞ通う村紅葉の。錦の直垂はただ世の常によもあらじ。いか様これは公達の。御中にこそあるらめと御名ゆかしき所に。籟をみればふしぎやな。短尺をつけられたり。見れば旅宿の題をすえ。行き暮れて。木の下陰を。宿とせば。花や今宵

の。主ならまし。一忠度と書かれたり、さては疑い嵐の音に、聞こえし薩摩の守に
てますぞ痛わしき。御身この花の、陰に立ち寄り給いしを、かく物語申さんとて、
日を暮らしとどめしなり。今は疑いよもあらじ。花は根に帰るなり、わが跡といて
たび給え、木陰を旅の宿とせば。花こそあるじなりけれ。

是界（ぜがい）

【分 類】五番目物（切能＝天狗物） *イロエ／舞働

【作 者】竹田法印宗盛

【主人公】前シテ：是界坊（直面）、後シテ：是界坊（面・大癒見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

中国の天狗の首領である是界坊は、中国において高慢の僧を残らず天狗道に誘い入れたので、次は、日本の仏法を妨げようと日本にやって来ます。そして、日本に渡ってくると、まず愛宕山の天狗の太郎坊を訪ね、相談し、比叡山を襲うことにします。語り合ううちに不動明王の威力が恐ろしく弱気になりますが、やがて決心して太郎坊の案内で比叡山に向います。

<中入>

比叡山の僧が勅命を受け、参内しようとして下山すると、にわかには嵐が起り天地が震動して、是界坊が天狗本来の姿で現れます。そして、僧を魔道に誘い入れようとするので、僧は悪魔降伏のため不動明王を念ずると、不動明王は矜羯羅童子と制多迦童子を従えて、十二天とともに現れます。また、日吉、石清水、松尾、北野、賀茂の神社の神々も現れて、是界坊に襲いかかります。是界坊も負けじと奮闘しますが、仏力・神力に翻弄され、さすがの是界坊も力を失って、もう決して日本には来ないと言って、中国に退散します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

明王諸天は、さておきぬ。明王諸天は、さておきぬ。東風ふく風に。東をみれば。山王権現。南に男山西に松の尾北野や加茂の。神風松風ふきはらえば。さしもに飛行のつばさも地に落ち。力もつき弓のやしまの浪の。たちさると見えしが又とび来たり。さるにても。かほどに妙なる佛力神力。今よりのちは。来たるまじと。いう声ばかりは虚空にのこり。いう声ばかりは虚空にのこって。姿は雲にぞ。入りにける。

岩舟（いわふね）

【分類】 初番目物（脇能＝荒神物）

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：童子（面・童子）、後シテ：龍神（面・黒髭（泥小飛出））

【あらすじ】（今回の独吟（ロンギ）の部分…下線部）

時の帝が摂津国（大阪府）住吉の浦に、新たに浜の市を開き、高麗や唐土の宝物を買い取るようにとの宣旨を下されます。そこで、命を受けた勅使が住吉へ下向します。すると、そこへ姿は唐人ながら、日本語を話す一人の童子が、銀盤に宝珠を乗せて現れます。勅使が不審に思って問いかけると、童子はめでたい御代を寿いで来た^と告げ、また、この宝珠も君に捧げたい、龍女の珠とでも思っただけ^らあればありがたい^と言います。そして、住吉の浜に立ついろいろな市のことなどを語ります。また、このあたりの景色をめで、さらに天がこのめでたい代をたたえて、極楽の宝物を降らすために、岩船に積み、今、ここへ漕ぎ寄せるところだと言います。そして、自分こそは、その岩船を漕ぐ天ノ探女であると明かして消え失せます。

<中入>

続いて、海中に住む龍神が、宝を積んだ岩船を守護するために現れます。そして、龍神は八大龍王達も呼び寄せ、力を合わせて岩船の綱手を引き寄せ、住吉の岸に無事に到着させます。山のように積まれた金銀珠玉は、御代の栄を寿ぐように光輝きます。

【詞章】（今回の独吟（ロンギ）の部分の抜粋）

千代までと聞こうる市の、数々に。聞こうる市の数々に。四方の門辺に人さわぐ。住吉の浜の市。宝の数を売るとかや。春の夜の一時の。千金をなすとても。例えはあらし住吉の。松風値なし。金銀珠玉いかばかり。千顆万顆の玉衣の。浦は津守の宮柱。立つ市やかた数々に。まがきも続く片そぎの。み戸しろ錦綾衣。頃も秋立つ夕月の。影に向こうや淡路瀉。絵島が磯は斜めにて。松の木間行く捨小舟。寄るか。出づるか。住吉の。岸打つ浪はぼうぼうたり松吹く風はせっせつとして。きさめごとかくやらん。その四つの緒の音を聞きし。潯陽の江と申すとも。これにはよも増きじ。面白の浦のけしきや。

融（とおる）

【分 類】五番目物（切能＝貴人物） *早舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：汐汲みの老人（面：三光尉）、後シテ：源融の霊（面：中将）

【あらすじ】（独調の部分…下線部）

東国から京へ上った諸国一見の旅僧が六条河原の院を訪れ有り、休んでいると、そこへ田子を担った老人がやって来ます。僧は、ここは海辺でもないのに汐汲み姿をしているのはどうしてかと尋ねます。すると老人は、ここは塩釜の浦を写した海辺だと答え、その昔に左大臣源融が塩釜の浦を模して造園し、毎日難波の浦から海水を運ばせて、塩を焼かせるという風流を楽しんだが、今はすっかり荒れ果てていると語ります。そして京の山々の名所を指し示しながら教えると、そろそろ汐を汲む頃合いだと見て消え失せます。

<中入>

僧は来合わせたこの辺りの者に、老人は源融の霊だろうと教えられ、弔うよう勧められます。僧は、その夜は夢の出会いを期待しながら旅寝をします。すると貴人姿の融大臣が現れ、名月の下で舞をまい、夜明けと共に消えて行きます。

【詞章】（独調の部分の抜粋）

あら面白の遊楽や。あら面白の遊楽や。そも名月のその中に。まだ初月の宵々に。影も姿も少なきはいかなる謂なるらん。それは西岫に。入り日のいまだ近ければ。その影に隠さる。たとえば月のある夜は。星の薄きがごとくなり。青陽の春の始めには。霞む夕べの遠山。黛の色に三日月の。影を舟にもたとえたり。また水中の遊魚は。釣針と疑い。雲上の飛鳥は。弓の影とも驚く。一輪もくみならず。万水ものぼらず。鳥は池辺の木に宿し。魚は月下の波に伏す。聞くとも飽かじ秋の夜の。鳥も鳴き。鐘も聞こえて。月もはや。影かたむきて明け方の。雲となり雨となる。この光陰に誘われて。月の都に。入りたもう粧い。あら名残惜しの面影や。名残惜しの。面影。

草紙洗小町（そうしあらいこまち）

【分 類】三番目物（鬘物） ＊中ノ舞（序ノ舞）

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：小野小町（面・増女）、後シテ：小野小町（面・増女）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

宮中での御歌合せの会に、大伴黒主の相手は、小野小町に定められました。黒主は、とうてい詠歌では勝てそうにないので、一策を案じます。そして供をつれて、その前夜、小町の私宅に忍び入り、小町が明日吟ずる歌を口ずさむのを盗み聞き、それを万葉の草紙に書き入れておきます。

<中入>

翌日、清涼殿の御歌会には、帝をはじめ、紀貫之や男女の歌人が居並びます。いよいよ小町の歌が披露されると、黒主はその歌は、万葉の古歌であると抗議し、その証拠にと、ひそかにその歌を書き入れた草紙を示します。小町は、万葉の歌をことごとく知っているのに、そんな筈はないと思いますが、帝の御前を憚り、争うことが出来ず、悩み悲しみます。そして、せめて黒主の出した草紙を洗わせてほしいと、貫之を通じて願い出ます。帝の許しをえて洗ってみると、書き入れた一首だけが消え失せ、入れ筆であることが露見し、小町の正しさが明らかになります。黒主は非を恥じて白書しようとしませんが、小町の取りなしで、帝も許され、小町はすすめられて、御祝を祝い、和歌の徳を讃えた舞をまいます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

霞たてば。遠山になる。朝ぼらけ。日影に見ゆる。松は千代まで。松は千代まで。四海の波も。四方の国々も。民の戸ざしも。ささぬ御代こそ。堯舜の佳例なれ。大和歌の起りは。あらかねの土にして。素盞鳴の尊の。守り給える神国なれば。花の都の。春ものどかに。花の都の。春ものどかに。和歌の道こそ。めでたけれ。

養老（ようろう）

【分 類】初番目物（脇能） ＊神舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：山神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

初夏に美濃国（岐阜県）本巢郡に霊水が湧き出るという報告があったので、雄略天皇の勅命を受けて勅使が下向します。一行が養老の滝のほとりに着くと、老人と若者の二人のきこりがやって来ます。勅使はこれこそ話に聞く養老の親子であろうと思って尋ねると、果たしてそうでした。老人は問われるままに養老の滝と名づけられたいわれを物語ります。次いで老人は勅使を滝壺に案内し、霊泉をほめ、他の霊水の例を挙げつつ、この薬の水の徳をたたえます。すべてを見聞した勅使が感涙を流し、この由を奏聞しようと都に帰ろうとすると、天から光がさし、花が降り、音楽が聞こえ、ただならぬ様子となります。

<中入>

そこへ土地の者が来て養老の滝のいわれを語り、滝の水を飲んで若返りの様を見せます。続いて養老の山神が出現し、清らかな水をたたえ、神仏はもとより同体であり、共に衆生を救おうとの御誓願であって、時として神として現れ、仏として現れるのであると述べます。そして、峰の嵐や谷川の音を音楽として舞を舞い、太平の世を祝して神の国に帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

松陰に。千代をうけたる。みどりかな。さもいさぎよき山の井の水。山の井の水。山の井の。水とうとうとして。波悠々たり。治まる御代の。君は船。君は船。臣は水。水よく船を。浮め浮めて。臣よく君をあおぐ御代ぞといく久しきも。尽きせじや尽きせじ。君に引かるる玉水の。上澄む時は。下も濁らぬ滝津の水の。浮き立つ波の。返すがえすも。よき御代なれや。よき御代なれや。万歳の道に帰りなん。万歳の道に帰りなん。

鶴亀（つるかめ）

【分 類】初番目物（脇能＝唐物） *楽

【作 者】不詳

【主人公】シテ：皇帝（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

昔、中国では年の始めに、華麗な宮殿で、四季の節会の最初の儀式が行われました。まず、官人が出て、御代を讃え、皇帝が月宮殿に行幸なる由を触れます。皇帝は大臣たちを従えて登場し、宮殿に着座して、群臣から拝賀を受けます。ついで大臣は毎年の嘉例により、鶴亀を舞わせることを奏聞します。池の水ぎわに遊ぶ鶴と亀は、皇帝の長寿を讃えてめでたく舞い納めると、皇帝も喜び、国土の繁栄を祝って、自ら舞を舞い、やがて長生殿へと帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

月宮殿の白衣の袂。月宮殿の白衣の袂の。いろいろ妙なる。花の袖。秋は時雨の紅葉の葉袖。冬は冴えゆく雪の袂を。ひるがえす衣も薄紫の。雲の上人の舞楽のかずかず。げいしょう羽衣の曲をなせば。山河草木国土豊に千代万代と。祝い奉り。官人駕輿丁御輿を早め。君の齡も長生殿に。君の齡も長生殿に。還御なるこそ。めでたけれ。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといわれます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かづら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>